
学園黙示録 **HIGHSCHOOL OF THE DEAD** **悪夢からの逃走者**

野木サキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD
悪夢からの逃走者

【Nコード】

N90530

【作者名】

野木サキ

【あらすじ】

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEADの二次創作です。今回の作品は自分の処女作なので、設定無視や駄文などになると思うのでご了承ください。設定は原作のマンガでいきなたいと思いますが、主人公と展開はオリジナルです。原作キャラはほとんど出てこないと思います。それでも良ければ読んでください。更新は月一位できればと思っています。最後にたぶん途中であきらめてしまうと思うので、あまり期待しないでください。すみません。

ACT・1 あなざー・すぶりんぐ・おぶ・ぞ・でっど(前書き)

今回が自分の処女作なので駄文で読みにくいと思いますがご了承ください。

あと学園黙示録HIGH SCHOOL OF THE DEADなのに主人公は中学3年生です。
本当にすみません。

ACT・1 あなぞー・すぶりんぐ・おぶ・ち・でっど

すべてが終わってしまった日の前日、俺はいつもと変わらない、いや少し落ち着かない日を過ごした。けれどこんな日々が二度と訪れることがないなんてこの時は思ってもいなかった。

(くっそ、やばい死ぬ死ぬ死ぬ)

少年は誰もいないガラガラの教室で一番端の机の下に隠れて息をひそめていた。普通の状況でこの光景を見たら他の人が見れば、少年はかなりの不審人物だが今はその普通の状況ではなく、かなりおかしい状況になっていた。

この教室の中には少年以外に二人の人がいたがその二人は服は所どころ破けておりそこから多くの傷跡が見て取れた、目はまるで獣のように殺気に満ちているようでもあり、なにもない虚無のような感じで口元からはよだれと血が滴り落ちていた。その二人と同じような奴らが教室をでた廊下にも何人かいた。

(やっぱりあのとき逃げてれば良かった、直感なんて信じるんじゃない。)
なかった。)

(後悔してる場合じゃない、さてどうやってここ逃げればいいんだ。)

少年は今までの人生のなかで最大のピンチに陥っていた。

1時間前

新学期が始まって、数日が過ぎ新しい出会いや環境に慣れ始め多くの生徒たちが落ち着きを取り戻そうとしていた頃、1人の少年はまだ慣れない学校の教室の窓から見慣れていない景色を眺めていた。

（はー、あの時から転校は何回かしてきたけどやっぱりこのまだ他校って感じはどうにもならないな。）

そんな憂鬱な気持ちからか今行われている4時間目の英語の授業は、まったく聞かずに外を眺めていた。その姿は絵になっているとは言い難いけれど、この教室で浮いているからなのか不思議と引き込まれる雰囲気かしていた。そんな中、英語教師は流暢な発音で英文を読んでいた。

「じゃ〜この文を一宮君いちみや訳してみてください」

「へえ！」

いきなり先生に指名され、授業をまったく聞いていなかった一宮はまぬけな声をしてしまった。

「転校生がんばれよ」「いいとこ見せろ」

などとクラスからガヤが起こり恥ずかしさに顔を少し赤くしながらも席から起立した。

「あゝえーと、すみません聞いていませんでした。」

そう言つてさらに顔を赤らめた。

「転校してきてすぐに授業を聞いてないなんて、もうここに慣れたみたいね。」

英語教師は少し嫌味を込めて一宮に言った。

「はい、すみません」

少し呆れ気味に

「君は転校生でもあるけど受験生でもあるんだから、もっと自覚をもつてね。」

でもやはり教師としてしつかりしているのだろう、ちゃんと俺のことも考えて注意してくれた。そんなイイ教師に教えてもらいながら俺はこの先生の名前を思い出せないでいた。

「はい。」

「わかつたら、教科書6ページの上から13行目から訳して。」

「はい、えゝあの島はどの国のものですか？それはわかりませんがあの国の外交能力の低さがわかりました。」

「はい、そうですね。ちゃんと訳せるんだからしつかり授業聞きましょう」

こから始まったのだった。

ACT・1 あなざー・すぶりんぐ・おぶ・ざ・でっど(後書き)

駄文で苦勞したと思いますが我慢強く読んで下さいましてありがとうございます。
ございます。

更新は月一位でいきたいと思えます。次回はヒロインを出すと思えます。あまり期待しないで待ってもらえれば、幸いです。

最後にまだ主人公とヒロインの名前が決まっています、苗字は決まっているので何か良い名前があったら教えてください。それでは、また次回で

ACT・2 あなざー・えすけーぶ・ふるむ・ざ・でつど ? (前書き)

今回も駄文で誤字脱字ですみませんがご了承ください。まだ主人公とヒロインの名前は決まっています。行き当たりばったりではありません。

ACT・2 あなざー・えすけーぶ・ふるむ・ざ・でつど？

「本当の人間の価値は、すべてがうまくいって満足しているときではなく、試験に立ち向かい、困難と闘っているときにわかる。」
マーティン・ルーサー・キング

さっきの放送によって教室はパニックに陥り、生徒たちは教室から出ようとドアに殺到していた。他の教室でも同じようなことが起きているのだろう、学校中から悲鳴やそれに近い声が聞こえており完全に秩序が失われていた。

「みんな、落ち着ついて、とにかく教室に戻りなさい！」

その中でも名前を知らない英語教師は生徒たちを止めようと必死に叫んでいた、非常事態でも生徒たちを落ち着かせて安全な行動をさせようとするなんて、正に教師の鏡と言うべきだろう。しかし、定期的に行われている避難訓練の甲斐なく肝心の生徒たちの方が判断能力を失ってしまった。それは、まるで氾濫した川の濁流のようであった。

しかし、一宮はその中で1人ドアの付近でなく自分の机の傍で外に出ようとする濁流を見つめていた。この時一宮は教室の中で最も落ち着いていた。その理由の1つには、彼が転校生でクラスにまだ馴染んでおらず濁流に流されなかったという事もあるのだが、それ

以上に彼に影響を与えていたことはほかにあった。

「どうしたんだ俺」

なんだこれ、さっきまで何もなかったのに。あの放送を聞いて俺も軽いパニックになって外に逃げようとして、席を立ちあがった瞬間に何か恐怖にも似たような不気味な感覚に襲われて足が動かなくなった。それは決して恐怖で足がすくんだとかそういうのとは別な気がした。

この時一宮は自分に起こった事で頭がいっぱいになっており、自分以外がすでに教室の外に出て行ってしまったことに気がついていなかった。そして彼がその事を知った時には、さきほどまでの悲鳴や怒号が嘘のようだった。

「・・・完全に置いていかれた。」

少し耳を澄ませば声は聞こえているし、走れば追いつけるだろう。でもあの感覚のせいで逃げる気にもなれないしどうしよう。

「まあ、さっきのアレのせいで無駄に冷静になったからとりあえず様子を見てみるか」

自分でもびっくりするくらいに冷静になってしまい、逆に危機感がなくなってしまった。

（窓から外の様子でも見てみるか。）

窓から顔だけ出して校庭を覗いて見ることにした、避難した時の集合場所は校庭か体育館だろうから状況が少しは分かるだろ。

(あれ？変だな。)

転校してきた時の話では、この床主第二中学は市内で一番大きく生徒数も最も多いはずなのにあまりにも校庭に見える人影が少ない避難場所が体育館だったとしても、あれほどのパニックそれなりの人数がいてもいいはず。それとももう学校から避難したのか？いやそんなはずがないまだあの放送が流れてから10分も経ってない。いったいどうなってるんだ？

そんな疑問をいだきながら一宮が数少ない人影を見ていると、1人の男に目が行った。

「確かあれは、うちのクラス担当の体育教師で元やり投げのオリンピック強化選手とか言ってたな名前は、え〜〜なんだっけ？」

俺、こんなに人の名前覚えなかったかな？まあ、はじめて会ったときから自分の自慢ばかりの好きになれないタイプの人だったしいいか。よく見るとそんなオリンピック先生は何人かの人に周りを取り囲まれていた。

「な、何なんだお前たちは、来るなこの化け物がー」

体育教師の山田哲郎^{やまた てつろう}は、追い込まれていた。彼の周りには十人ほどの人？が彼を囲みながら、少しずつ迫ってきていた。哲郎はここに来るまでにこいつらが何なのか最低限のことを理解していた、だからこそ選択肢は残されていなかった。

「くっそー、死ねー、死ねー」

哲郎は目の前のセーラー服を着た元生徒を殴り倒し、それからマウントを取りそこからさらに顔を殴り続けた。

「死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ、俺は他の奴らみたいに殺されるか。」

だがその後ろから他の者たちが哲郎に一斉に襲い掛かった。

「ひっいいいい、あが、だ・・ずげ・・・」

その光景を三階の教室から見ていた一宮は自分が目の当りした事が信じられずその場で固まってしまった。

(何なんだ今の、人が人を襲ってたと言うより食べてた。こんな事ゲームやマンガとかの空想の話じゃないのか。くそー、何がどうなってるんだよ。)

先ほどまでの冷静さはいっきに吹き飛び、頭の中は混乱していた。

(だめだ落ち着かないと、とにかく落ち着け)

一宮は自分を落ち着かせるために深呼吸をしたが、やはりそれだけでは落ち着くはずもなくさらに恐怖から体が震えだした。

「ははは、ダセー今頃になってビビるなんて。」

背中に爪を立ててどうにかして震え止めようと体を小さくしていたがその震えが止まったのは10分ほどしてからだった。ようやく動けるようになった一宮はまた窓から外の様子を観察し始めた。

(こんな所でじっとしてたってあの時みたいに誰かが助けしてくれるかなんて分からないんだ。自分で行動するためにも今は、情報を集

めよう。」

そう自分に言い聞かせて外の様子をうかがい続けていると、さつき殺されたと思われたオリンピック教師が動いていることに気が付いた。

「死んでなかったのか？いや違う」

よくオリンピック教師を見るとさつき襲ったくあいつら>と同じ動きをしていた。

「あいつらに襲われたら、そいつもくあいつら>みたいになるのか・
・どこまで、いやこれは現実なんだ。これで1つ分かった。」

たぶん、逃げたほとんどの人間がくあいつら>に襲われたから校庭にいる人間が少なかったのか。

もう一度外を覗くとくあいつら>以外の人間はいなかった。

その予想が当たっていけば、校舎の中にはかなりの数のくあいつら>がいるはずだ。

「できれば、はずれいてほしいけど念のために使える物を探してみよう。」

そう言っで一宮は、教室の中を探し始めた。まずは、掃除器具を置いてある縦長のロッカーを開けてみると野球部の誰かの物である金属バットが入っていた。

「なんでこんな所に？まあ武器にはなるか、でも久しぶりだなバットを持つのは。」

その場で何回か素振りを試してみても使えることを確認した。その後も探してみたが、使えそうな物は見当たらなかった。

「あと残るのは個人のカバンのぐらいだけど気がひけるな、いやいや今はそんな事気にしてる場合じゃない。」

そして、クラスメイトたちのカバンを探し始めていると一宮は驚くような物を見つけた。

「こ、れ、はサバイバルナイフだよな初めて見た。なんでこんな物を学校に持ってきてたんだ？」

ナイフは刃渡りは20cm以上あるだろう、でもこれは法律的にアウトだろ。このカバンの主は・・・田中君あんまり目立つ方じゃないけど決して悪い子じゃないと思ったけどな、転校生の俺によく話しかけてくれたし。よく見るとナイフの脇に真っ黒のノートが置いてあり中身を見てみると。

「・・・・・・・・・・・・・・・・見なかった事にしよう。もしかしたら、こんなおかしな事になる前に事件は起きていたかもしれないな。でもおかげで良い物が手に入った方がいいか。」

その後も搜索をして、使えそうなものは、100円ライター、爆竹10個、カリーメト1箱、スポーツ飲料2個ぐらいしか見つからなかった。

「とりあえず、これくらいあればいいか。あとはカバンに詰めたら出発するか。」

その時、

ガンッ

教室の外から何かにぶつかると音が聞こえ、一宮は急いで荷物をまとめて何故か机の下に隠れた。

一宮が机の下に隠れてからほどなくしてくあいつらが教室に侵入して、冒頭の場面に戻ることになる。くあいつらが来てから数分経つが一宮は奇跡的見つからないでいた、だがくあいつらも一向にここを立ち去る気はなさそうだった。

(このままじゃ必ず見つかるあいつらがこっちに背中を向けている間に教室を出るしかない。)

そのために少し身を乗り出してくあいつらの様子みようとした瞬間に一人のくあいつらと完全に目が合ってしまった。

(最悪だここに来て運のつきかよ。こ、こ殺される。)

くあいつらは、一宮を捉えてこっちに向かってゆっくりむかってきた。殺される恐怖から目をつぶり身を縮み込んで動けなくなつた。しかし一宮が予想していた痛みが来ない、なにが起きたのか目を開けてくあいつらを見てみると自分のすぐ近くに居るが一宮を襲わずにまた別の方向に歩きだした。

(なんで襲つてこないんだ……！もしかして目が見えないのか、でもさつきオリ(以下略)先生は襲われた。ということは他の感覚で人間を捕捉してるのか、人間の視覚以外の感覚は臭覚、味覚、触覚、聴覚だったはず。まず臭覚なら人間の臭いを嗅ぎ分けら

れるなら見つけられるはずだから違う、味覚は論外だろう、触覚は視覚がないならほとんど意味ないなそれに触覚があったとしても触れなければ大丈夫だ、だったら残るは聴覚、これならオリ（以下略）先生が見つかつたのも納得だ。）

これが本当なら音さえださなければここから脱出する事が出来る、しかしこれはあくまでも一宮が考えた仮説、これが実際そうなのかは分からない。ただでさえ死人が蘇り襲ってくるなんて、非科学的な事が起こっているのだ何があってもおかしくないのだ。

（でも、今の俺にはこの仮説を信じるほか選択肢はない……。やってやる！やってやるぞ。）

そう自分に言い聞かせて、音だけはたてないように慎重に机のしたから出てその場に立ちあがった。

（<あいつら>の視覚には入っているけど襲ってこない。やっぱり、<あいつら>は聴覚を頼りにして人間を見つけているんだ。でも一応……そらっ）

一宮は机の下で見つけた消しゴムを黒板に投げつけた。

ゴンッ

消しゴムが当たった瞬間、教室にいるあいつらが向かって襲い掛かりぶつかった。教室の近くに居た他の<あいつら>も教室の近くにやってきた。

（よっし！これで<あいつら>の事は分かった。これから逃げるのが少しはマシになるかな。）

そう言って一宮は音を立てずにゆっくりと後ろのドアから廊下に出た。

「ッー！」

廊下に出た光景をみた瞬間、彼は危うく声を出しそうになった。その理由は、教室から階段までの15mの間に10人ぐらいのくあいつらゝがひしめていたのだ。それに廊下には大量のが血や人の肉片らしきものが所どころに飛び散っていた。

(あぶねー！！！！！落ち着け大丈夫だ。幸いくあいつらゝは道を塞いでない、ゆっくりぶつからずにいける。俺は……………やれる。)

自分でも驚くほどに、こんな状況に順応していた。もしかしたら俺もくあいつらゝとは違う意味で化け物になりつつあるのかもしれない。

(静かに、ゆっくり、静かに、ゆっくり、静かに、ゆっくり)

変な呪文を心の中で唱えながら一宮は歩き続けて階段まで、あと半分のところまで来ていた。ここまでの間くあいつらゝは彼が見えてないかのように、一切見向きもしなかった。

(半分くらい来たか、あと半ぶ……………)

自分が目指す場所を確認するために階段近くの踊り場を見た時に、それはいた。廊下を出た時には絶対に居なかった。

それは肩にかかるぐらいの髪でメガネを掛けており、身長は一宮

と同じくらいで顔は整っている綺麗な少女だった。だが少女の右手にはそれとは不釣り合いな木刀を持っており、その木刀にはべつとりと血が付いていた。

一宮にとってこの木刀少女との出会いがさらなる試練をもたらすのだった。

ACT・2 あなざー・えすけーぶ・ふるむ・ざ・でつど ? (後書き)

前話でヒロインを出すと言っておきながら最後にちよこつと出ただけで本当にすみません。自分の思った以上に教室から出るのに時間がかかってしまいました。たぶん当分の間学校から出られません、更新も遅くなるので期待しないで待っていてください。

あとまだ名前募集中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9053o/>

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD 悪夢からの逃走者

2010年11月22日21時36分発行